

## 吃音をめぐる豊かな「語り」の世界への招待 ～ナラティブ・アプローチの視点から～

坂本英樹（どもる子どもの親、教員、  
NPO 法人大阪スタタリングプロジェクト）

「吃音否定から吃音肯定への吃音の取り組み」と題されたこの「第1回 親、教師、言語聴覚士のための吃音講習会」を貫くキーワードは、「ナラティブ・アプローチ」である。耳慣れない言葉かも知れないが、心理や福祉、社会学などの分野で近年、注目を集めている考え方、理論である。

昨年秋、滋賀県での日本吃音臨床研究会主催の「第17回 吃音ショートコース」は「当事者研究」をテーマに、北海道の浦河から精神障害をもつ人たちのコミュニティである「べてるの家」の向谷地生良さんを迎えてのものだった。それは向谷地さんの紹介する精神障害の当事者が紡ぎ出す言葉、語りとどもる当事者からの発言、語りとが共振した刺激的な二泊三日であったのだが、参加者が経験したのはある語り、次の語りを生みだし、そこに新たな意味が見出せるという地平であった。私たちはどもる当事者の経験がべてるの家の人たちの経験とつながることができたとの思いをもつことができただけでなく、他のさまざまな領域で活動している当事者ともつながることができるとの確信から、ナラティブ（Narrative = 語り、物語）を切り口として、今回の講習会を開催することとしたのである。この考え方をを用いることで、各地の「ことばの教室」での取り組みや現在は NPO 法人大阪スタタリングプロジェクトが開いている、40年以上の歴史をもつ「大阪吃音教室」での活動に新たな視点から迫ることができるだろう。また、この講習会の参加者の思いをつなげることもできるのではないかと考える。

本稿は、私自身が参加している大阪吃音教室や「吃音親子サマーキャンプ」などを題材として、ナラティブ・アプローチの基本的な考え方や技法を紹介することにある。

### 「問題」と「人」を分けること―「外在化」

大阪吃音教室には吃音と上手につき合うための3つの柱のひとつとして、「吃音に関する基礎講座」がある。吃音そのものを知るために、W.ジョンソンの言語関係図やシーアンの吃音氷山説などをもとにグループワークを行なっている。毎回のようにいる初参加の人にとって、この吃音を知る講座はとりわけ印象が深いようだ。初参加者の多くは「朝礼の順番が回ってきそうなので・・・」、「いままでずっと吃音に悩んでいて・・・」というような動機での参加なのだが、吃音が自分の日常に与える影響や吃音に悩んでいる自分については注意が向くことはあっても、吃音そのものについては案外と知らないことが多いことに新鮮な驚きを感じているのだと思う。

ここで試みられているのは、ナラティブ・アプローチでいうところの**問題の「外在化」**である。問題と問題の原因と問題の影響とを分け、問題そのものをとりだして他者とともに外から眺めてみるという技法である。他者とともにというところがポイントである。問題そのものについてセルフヘルプ・グループや当事者グループなどの仲間と語るこの共同作業を通して、自分では気づかなかった点が明らかになる。他者の語りを通して自分を振り返る経験。初参加者が上気しながら異口同音に語る「こんなにどもる人に会ったのも、話したのも初めて！」という振り返りの発言は、仲間となれる人と出会えたことと問題が明らかになること自体が本人にとってはエンパワメントの経験になることを物語っている。

べてるの家なら、もう少しストレートに「問題」と「人」とを分けると表現する。統合失調症の人がもつ幻聴や幻覚を薬によって押さえつけるのではなく、「幻聴さん」、「幻覚さん」と呼び、それを

擬人化し、つき合い方をメンバーで「**当事者研究**」として行なっていく。その過程で、当事者は医師から与えられた病名ではなく、自分で自己病名を名づけて行く。名づけられ、カテゴライズされる存在から、名乗り、アイデンティファイする存在への転換、当事者のもつ力が発揮されている。

## ユニークな結果とオルタナティブ・ストーリー

外在化を通して明らかになるのは、どもりとは何かという問題そのもののもつ多様な側面だけではなく、その当事者がある局面においてはどもりにうまく対処していた経験であり、どもりに影響されずに何事かを成し遂げた経験である。通常、これらの経験は「どもりに悩んでいる」というような現在の自分を強く規定し、すべての経験をそう解釈させる「**ドミナント・ストーリー（支配的な物語）**」をもつ人にとっては例外的なこととして語られなかったり、自分の人生を物語るエピソードとしては重要なものとみなされなかったりするのだが、ナラティブ・アプローチではこの語りを「**ユニークな結果**」として焦点化していくのである。

ユニークな結果はドミナント・ストーリーの文脈からは「**生きられた経験**」とは認識されてこなかったのだが、他者からの肯定的な反応を受けることで意味づけが変わり、認識の枠組みが変化することでもたらされるものである。どもりにまつわる失敗談を語ったところ、周囲から大笑いされ、最初は立腹したものの確かにそこにはある種のユーモアがあることがわかり、以降その失敗談は愉快な話として本人から披露されることはよくあることだ。この失敗を恥じる自己から、笑い話として語れる自己への転換には仲間の力がある。私たちは自分ひとりだけの語りではどうしてもドミナント・ストーリーに回収されがちで、物語の外に出るのは難しい。他者とともに語ることで、その他者がユニークな結果の証人となり、共著者となってくれることで、どもりに悩んでいた物語から、どもりを生きサバイバルしてきた物語へと、ドミナント・ストーリーから「**オルタナティブ・ストーリー（既存のものに代わる物語）**」へと変わるのである。ナラティブ・アプローチではこの新たな語りを「**認定証**」という形で本人に示すという方法もある。自他ともに見える形にすることで、オルタナティブ・ストーリーに確かな輪郭を与えていくのである。交流分析における「**許可証**」や吃音親子サマーキャンプにおける「**卒業証書**」、べてるの家の幻覚&妄想大会におけるユニークな命名をされた各賞も同様の構造をもっている。どれも見事な外在化の技法であろう。

## ナラティブ・言葉・自己

語りが変わることで自己認識が変わることに疑問を感じる人もいるであろうから、ここでナラティブ・アプローチにおいて「**自己**」というものがどう理解されているのかについて触れる必要があるだろう。ナラティブ・アプローチにおいて「**自己とは自己語りである**」(1)と理解されている。自分をどう語るかによって、そのつど新たに立ち表れてくるのが自己であるという意味である。

大阪吃音教室では新しい参加者の語りに促されて、自分がどのような過程でこのグループに出会い、どういう印象を持ったのか、一時は足が遠のいたのになぜいま熱心に参加しているのか等、私自身もそうなのだが大阪吃音教室と自己との関わりについて繰り返し語るメンバーが実に多い。それは語ることを通して、どもりと向き合っている自分を確認しているのであろう。現在どもりとうまくつき合えていれば、過去の「**生きられた経験**」のなかから、それとうまくつながるような出来事が自己物語の前面に出てくるであろうし、うまくつき合えていないとしたら、逆に過去のうまくいかなかった出来事が前面に出てくるのである。つまり、自己語りは現在を起点とした、絶えざる過去の再編作業なのである。それゆえ私たちは繰り返し繰り返し、他者の語りに促されて、新たな自己語りを紡ぎ出す。語ることでいまの自分を立ち上げていくのである。

現在の自己は未来に開かれたものとして語りのなかから表れてくる。だから、どういう風に語っていくのか、どんな「**言葉**」を使うのが重要なのだ。べてるの家では、「**苦勞を取りもどす**」という

語り方で当事者研究を行なっている。当事者の主体性が立ち上がっていく語り方だろう。自分の吃症状を「つまってる」と表現するのか、「どもってる」と表現するのかとでは吃音との向き合い方は異なってくるのではないだろうか。大阪吃音教室ではサバイバルという言葉がよく使われる。吃音にいろいろと影響されたであろう半生をサバイバルという言葉から眺め返すと、そこには吃音を生きてきたプライドを発見することができるのではないだろうか。

ナラティブ・アプローチが主張するのは「言葉は世界をつくる」(2)という世界観である。ある現実があってそれを表す言葉があるのではなく、ある言葉によって現実が構成されていくと考えるのである。たとえば、「児童虐待」という言葉によって私たちははじめて、特定の事例を虐待として認識できるようになったのであり、一昔前の「しつけ」や「折檻」という言葉しか持ち得なかった時にはあくまでもその家庭の問題であり、社会問題としては認識されていなかったのである。それゆえ、吃音という言語に関わる問題を考える私たちは言葉や語り方に敏感でありたいと思う。すでに半世紀以上も前に、W.ジョンソンは子どもがどもりを持ったまま「立派に生きていけるように訓練するためには、・・・自分の持っている問題について・・・できるだけ知的に、それをことばに言い表すという能力を培うことである」(3)と述べている。この講習会ではことばの教室の教員による実践報告がある。言語関係図や吃音冰山、「どもりカルタ」を通して、子どもたちがどもりと向きあう自己をどんな言葉や語りで表現するのかに注目して欲しい。「吃音肯定」というオルタナティブ・ストーリーが示されているはずだ。

## 専門性について 1—無知の姿勢

W.ジョンソンは「問題には、それを構成するメンバーがいる」(4)と述べ、話し手の言葉を聞く相手の重要性を指摘している。この講習会が「親、教師、言語聴覚士のための」と強調し、吃音親子サマーキャンプが親子での参加をその条件としているのはこのメンバーが子どものどもり問題の重要な構成員であるからだ。

ナラティブ・アプローチではこれらの当事者の語りを聞くメンバーに「無知の姿勢」を求めている。通常、専門性をもつといわれる側が問題をもつ側に何かを聞くといった場合、すでに知っていることを儀礼的に尋ねているにすぎない場合が多い。医師は既知の病状をただ患者に確認しているだけであり、教員の生徒への質問は自分が知っていることについて生徒が知らないことを明らかにするためだけに聞いているに過ぎない。重い雰囲気はその場を支配していることだろう。逆に真の意味での探求型や問題解決型の授業が成立した時の教室の開放感を知っている教員はどれだけいるだろうか。

さて、吃音の場合、その原因は不明である。吃症状も人によってさまざまな表れ方をする。何に悩み、困り、日常や学校生活にどんな影響を与えているのか。本人が把握していることもあるだろうが、未知のこともあるだろう。ましてや、問題の構成員にとっては未知のことばかりである。だから、子どもと一緒に考えるしかない。教えて欲しいと当事者に向き合うのである。これを無知の姿勢という。親は親であるがゆえに子どものことを分かっていると思いたい。教員、言語聴覚士は専門教育を受け、教える立場にあるから、自分の方がよく知っていると思ひそかに思っている。しかし、この姿勢からはいくら子どもの話を聞いても、ドミナント・ストーリーしか見出すことはできないだろう。思い込みや専門性が邪魔をして既知の話しか聞かないからだ。いまだ語られていない物語、オルタナティブ・ストーリーはそれから自由なもの同士の共同作業のなかから生まれるのではないだろうか。教員、言語聴覚士に求められる専門性とは、自らの専門性から自由に無知の姿勢に立ち続けるということなのである。

聞くというと、より深い意味を込めて「聴く」という言葉が使われることも多い。「傾聴と共感」という言い方は介護や看護の分野を超え、教育の世界でも使われるようになった。広くケアといわれる領域すべてをおおう言葉となっている。しかし、当事者は本当に傾聴されているのであろうか。

現在は静岡県内の特別養護老人ホームで介護職員として勤務している民俗学者の六車由美さんは多

くの介護職員が一見、入所している認知症をもつ高齢者の話を傾聴しているように見えながらも実はその語られる内容自体については何の注意も払わずに、聴いているという姿勢と態度を相手に示しているだけであること、傾聴は共感とセットになり、感情労働になってしまっていることを指摘している。六車さんは傾聴と異なり、「知的好奇心」(5)をもって入所者の「語られた言葉を言葉通りに理解すること」(6)によって、さらなる語りを生み出し、語る当事者の人生の回想記を編み出している。そこには社会変動の激しかった近代日本社会を生き抜いた市井の人々の暮らしと生き方が見事に活写されている。そして、この回想記をもとに当事者と家族がつながっていき、そこにまた新たな語りが生まれていく。当事者、家族、六車さん、関わる人すべてが自己変容を遂げている。六車さんはナラティブという言葉を使っているが、見事なアプローチになっている。この姿勢から私たちが学ぶことは多いと思う。

## 専門性について 2 一対等であるということ

教員、言語聴覚士が前にする子どもは、それまで自分ひとりの力で大技、小技を駆使し、吃音を生きてきた、サバイバルしてきた当事者である。そのことに対する敬意と驚き、知的好奇心、だから教えて欲しいと思うのだ。そんな子どもとこれから手探りでどもりとの向き合い方やクラスの友だちとの関係についても考え、実践していく。べてる流にいうと研究していくのである。無知の姿勢の背景には、この共同研究者としての「**対等性**」がある。対等性のなかからしか、物語の外にでる新たな語りは生まれてはこないだろう。映画「英国王のスピーチ」において吃音に悩むジョージ6世に対する臨床家のログが徹底してこだわったのはこの対等性ということであった。ジョージ6世の開戦スピーチが成功したのは吃音が治ったのではなく、ログとの語り、対話によって自身の吃音から生じた、または吃音を言い訳とした悩み、課題と向き合うことができたからなのである。

ナラティブ・アプローチでは対等性を保障するためにアプローチが行なわれる「場」の問題にも注意を払う。慣れない交通機関を使い、初めて訪れる病院で長い時間待ち、通された無機的な部屋で白衣を着た大人と相対する。ここからはユニークな結果もオルタナティブ・ストーリーも生まれることはないのではないのか。一方、吃音親子サマーキャンプで子どもが見せる姿、発揮する力、語りはどうだろうか。キャンプという場のなかで子どもたちが生き活きとサバイバルする姿に魅せられて、ことばの教室の教員や言語聴覚士は、キャンプスタッフのリピーターとなっていく。子どもが生きる場で見せる力に、専門家としての自己が揺さぶりをかけられ、日頃の子どもの関わり方を見直す契機となっているがゆえであろう。ナラティブ・アプローチが志向するのはこうした新しい専門性であり、専門家像なのである。

## 生きるかたちを求めて— Evidence に対抗して

「根拠に基づいた医療」(Evidence Based Medicine : EBM) という考え方がある。最近では「発達障害」の領域でも使われることもあるこのエビデンスという言葉が、吃音の世界にも導入されようとしている。確かに前述した病院のような環境なら何ほどかのデータを採ることは可能だろう。北米で最新の統合的アプローチといわれる「ゆっくり、そっと、やわらかく」というどこか既視感のある流暢性促進技法も効果が見えるのかも知れない。しかし、その効果は日常で発揮され、維持されるのだろうか。いままでどれだけ多くの人たちが吃音矯正所の門を何度もたたいたことだろう。

今回、講師としてお迎えする浜田寿美男さんは「力は場のなかで育つ。力を純粋に育ててそれから使う、などということはほんらいありえないことなのだ」(7)と喝破している。私たちが二泊三日というキャンプの形にこだわるのは、丸一日はまったく親と触れることのない場で仲間と寝食をともにしつつ、どもりについて話し合い、作文を書き、演劇に挑戦するという生活世界をつくることのできるからだ。「生きる場があつてはじめてそこに生きる力が生まれる」(8)からなのである。私たちは

ここから生まれる子どもたちの力、工夫を大切にしたい。これらはエビデンスとして計測化、数量化できるものではないが、豊かな語りを生むことは確かだろう。この「語りに基づいた実践 (Narrative Based Practice)」を私たちは子どもたちとともに創造していきたい。

## 親、教師、言語聴覚士も物語を生きる

最後に再び、親、教師、言語聴覚士のもつ意味について考えたい。私たちは無色透明な存在として子どもの傍らに在るわけではない。また、子どもも自分たちの語りをただ、「うん、うん」とうなずいて聞いてもらえることを望んでいるのでもない。自分の話に大人たちがどう答えてくれるのかを期待しているのだ。語りは語りと出会い対話となることを求めている。大人も対等に、そして誠実に語りださなければならない。そこから新たな物語が生まれる。私たちは子どもの語りの共著者として、物語の内側をともに生きているのだ。だから、「治ってほしい、治るはずだ」という思いで子どもに関わるとき、じつはいまのこの子のありのままを否定していること」(9)を自覚しなければならない。私たちの吃音否定から子どもの自己否定が生じる。「私たちはまず自らが吃音者であること、また、どもりを持ったままの生き方を確立することを、社会にも自らにも宣言する」(10)とした「吃音者宣言」(1976)から人の半生に相当する時間を経て、今回新たな装いで自己否定から自己肯定へ、「吃音否定から吃音肯定へ」を提唱するゆえんである。伊藤伸二さんはいまそれを「どもって生きる、覚悟を決める」と表現する。

浦河赤十字病院の医師である川村敏明さんは、「治せない医者」を標榜し、べてるの家の人たちをはじめとした当事者と相対している。私たち親、教員、言語聴覚士は子どもに「私のどもりは治るの？」と聞かれたらどう答えるのだろうか。専門的な言葉を連ねて煙に巻くか、それとも対等に子どもと向き合って誠実に答えるのか。子どもには事実を受け止める力があることは確かなことだ。本稿の最後になって明らかとなったのは、治せない親、教員、言語聴覚士というユニークな結果である。ここから開かれていく、子どもとの関わり方、さまざまな工夫、専門性という地平に私たちはいま立っている。

### <引用文献>

- (1)、(2) 野口裕二 2002 「物語としてのケア」 医学書院
- (3)、(4) W.ジョンソン、D.メラー編 1967 = 田口恒夫訳 1974 「教室の言語障害児」 日本文化科学社
- (5)、(6) 六車由美 2012 「驚きの介護民俗学」 医学書院
- (7)、(8) 浜田寿美男 1998 「いま子どもたちの生きるかたち」 ミネルヴァ書房
- (9) 浜田寿美男 2009 「障害と子どもたちの生きるかたち」 岩波書店 (1997 「ありのままを生きる」 改題)
- (10) 伊藤伸二編 1976 「吃音者宣言」 たいまつ社